

トマトキバガ

本種は南アメリカ原産であるが、2006（平成18）年にスペインへの侵入が確認されて以降、ヨーロッパ、アフリカ、中央アメリカ、西アジア、アラビア半島、インド、ネパール、東南アジアに分布を拡大し、2021（令和3）年までに台湾、中国、中央アジア諸国等の近隣地域でも発生が確認されている。

国内では、2021（令和3）年10月に熊本県、同年12月に宮崎県のトマトほ場で初めて確認された。それ以降、鹿児島県、大分県、福岡県、長崎県、愛媛県、和歌山県、岡山県、山口県、広島県、佐賀県、沖縄県及び青森県でトラップによる誘殺が確認されている。

1. 形態

成虫は翅を閉じた静止時で体長5～7mm（前翅長5mm弱、開張約10mm）。前翅は灰褐色で黒色斑が散在する。後翅は一様に淡黒褐色である。

幼虫は終齢で約8mmに達する。体色は淡緑色～淡赤白色で、前胸の背面後縁に狭い黒色横帯を有する。



成虫(植物防疫所原図)



幼虫(植物防疫所原図)

2. 生態及び被害

1年に複数回の世代が発生し、繁殖力が高い。発生世代数は環境条件によって異なり、南米では年に10～12世代発生することが報告されている。卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度で、気温が低い時期はさらに延びる。また、発育下限温度は8℃とされている。成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。雌は一生のうち平均で約260個の卵を寄生植物の葉の裏面などに産み付ける。幼虫は1齢～4齢までの生育ステージがあり、土中や葉の表面で蛹化する。

トマト、ピーマン、ナス、タバコ、バレイショなどのナス科植物が主要な寄主植物であるが、マメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。トマトでは、葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成される。食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる。果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じ果実品質が著しく低下する。



葉の被害(植物防疫所原図)



果実の被害(植物防疫所原図)

3. 防除対策

ほ場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。

発生を拡大させないため、薬剤散布を行うとともに、被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋没するか、ビニル袋などに入れて一定期間密閉し、寄生した成幼虫を全て死滅させ、適切に処分する。